

## ウズベキスタンでシリアを想う～Regional Cooperationの重要性～

中央アジアの国・ウズベキスタンへ、FAO のワークショップへの参加と同国の農業事情調査という2つの目的で訪問する機会があった。ワークショップは7月7日から11日までの5日間、首都タシケントで行われた。その内容は、ウズベキスタンで現在実施中のFAO プロジェクトの活動内容とこれまでの成果の報告、参加各国のカントリーレポートの発表、現場視察、グループ討議によるプロジェクトへの提言作成等だった。また後半の第2週目は、農業分野における今後の協力可能性に関する調査という目的で、さまざまな関連機関を訪問して情報収集を行った。

ウズベキスタン農業の特徴と問題点を非常に簡単に言うと、綿花、小麦等を主要作物とした灌漑農業であること、それにともなって塩害等の発生や灌漑施設の老朽化等の問題が存在していることである。また農地の灌漑率は95%で、灌漑なしにはウズベキスタンの農業は考えられないことがうかがえる。この背景には乾燥気候で降雨が少ないこと、アムダリア、シルダリアという河川水源があること、旧ソ連時代に灌漑施設が整備され、それらが(問題を抱えながらも)現存していること等があげられる。

さて、こうした状況の中でウズベク側にとって最大の関心事の一つは塩害対策及び老朽化した灌漑施設のリハビリとそれらに対する資金援助であり、新しいハイテク技術導入や機材供与の要望も強い。しかし、最新の資機材や資金を供与すれば問題がちどころに解決するわけではなく、当然ながらそれともなう技術の導入・移転、人材の育成等を含めて、ハード面とソフト面の両面における改善が必要である。特にソフト面での協力という観点からは、たとえば野菜・果物、米等の栽培技術や灌漑施設維持管理のための水利組合の設立と運営、農協や農業普及所等の農民支援組織に関するノウハウ等々、日本のこれまでの内外における経験や技術が生かせる点が多々あると思われる。

また今回特に感じたのは、「Regional Cooperation」(地域間の専門家やC/P等の人的交流)の重要性や効果である。暑く乾いた夏、豊富な果物や野菜、広大な小麦と綿花の畑、旧ソ連の計画経済の悪影響や強力なトップダウン・システム・・・このように、ウズベキスタンとシリアではかなり共通点があり、お互いの経験や知識を交換することは非常に意義があるように思う。シリアにおける経験や技術はウズベキスタンを初め中央アジア諸国で活用できる可能性があり、またその逆も考えられる。さらに広げて言えば、周辺国のアフガニスタン、パキスタン、エジプト、イラン等を含めて共通性が見られる。こうした地域間の人的交流や技術交換は、問題解決や人材育成という点から非常に有益であると思われる。

ふり返ってみると、古くはシルクロードの時代から、この地はさまざまな人々が行き来する場所であった。またシリアとの関係においても、旧ソ連時代にモスクワからの支援を受けていた頃、シリアの灌漑施設を建設するためにウズベキスタンから技術者や労働者が派遣されていたというつながりもある。さまざまな専門分野の人たちの交流によって、今ある技術がさらに改善されたり、新たなアイデアが生まれたりして、より意義深い技術協力ができるのではないだろうか。(ウズベキスタンにて：湖東)



バザールのスイカ



稲作研究所の試験圃場